

男女共同参画社会を考える

井伊分(いーぶん)さんちの 双子日記



はじめに

第1話

男子厨房(ちゅうぼう)に入らず？

第2話

イメージで決めてる？

第3話

女の子なのに？男の子のくせに？

第4話

どうして自分の名前書かないの？

第5話

家庭科はだれの科目？

第6話

介護休暇はだれが取る？

第7話

男は理系？女は文系？

第8話

DVなんて他人事？

第9話

人目を引けばいい？

第10話

結婚したら当然夫の名字？

第11話

双子日記の最終回？

おわりに

この「井伊分さんちの双子日記」は、一宮市広報に連載した男女共同参画社会を考えるコラム(平成16年4月～平成17年3月)をまとめたものです。

編集協力／岡 久美子 イラスト協力／後藤 明美 発行・編集／企画政策課

男女共同参画社会を考える
『井伊分（いーぶん）さんちの双子日記』

はじめに ～井伊分さんちへようこそ～

あなたは『男女共同参画（だんじょきょうどうさんかく）』という言葉を見たり聞いたりしたことがありますか。

「何だか難しそう」

「自分には関係ないかな」

「新聞で見たことはあるけれど…」

など、身近な言葉ではないかもしれませんが。

実は、ここにも『男女共同参画』という言葉になじみのなかった家族がいます。井伊分（いーぶん）さん一家です。

家長を自負し、責任感の強い一郎さん。

社交的な専業主婦の妻・千代さん。

二人の優しい息子・登さんは結婚して近所に住んでいます。

登さんの妻でしっかり者の美沙さんは、現在産休中。

そしてつい最近、井伊分さんちには家族が二人も増えました。

靖乃（やすの）ちゃんと修斗（しゅうと）ちゃんという、女の子と男の子の双子が誕生したからです。

両親の登さんと美沙さんは、色々迷いながら話し合った結果、今までどおり共働きを続けることにしました。

楽しいことも、大変なことも、戸惑うことも、ニュースになるような大事件とは違うものの、井伊分さんちには様々なことが起こります。

この井伊分さんちの小さな日常を通して、あなたも男女共同参画について考えてみませんか。

男女共同参画社会を考える
『井伊分(いーぶん)さんちの双子日記』

第1話 男子厨房(ちゅうぼう) に入らず



井伊分さんちの食卓で、一郎さんが何かを手に首をひねっています。
一郎さんの妻・千代さんがサークルでもらってきた『いちのみやし男女共同参画情報紙 いーぶん』の内容にどうやら納得がいかないようです。

＜男の役割、女の役割があって当然だろ。家事は女がするものだ。＞

一郎さんは、そう思ったものの、いかにもその考え方が昔風に思えて、口に出せませんでした。横目でちらりとそんな夫の様子を見ていた千代さんは、

「あなたもそのうち台所に立つことがあるかもね。」

と笑っています。一郎さんは、ぶっきらぼうに答えました。

「男子厨房(ちゅうぼう)に入らずという言葉を知らんのか。ほら、行くぞ。」

二人はこれから初孫の顔を見に行くのです。

近くに住む息子・登さん夫妻の家では、ちょうどおむつを換えているところでした。

「登、お前がやっているのか!？」台所にお茶をいれにいった女性陣に聞こえないよう、一郎さんは言いました。

「靖乃と修斗二人いるし、できないと困るからね。」答える登さんは手慣れた様子。どうやら毎日がこの調子ようです。

その時、チャイムが鳴りました。登さんの妻・美沙さんが玄関に向かいます。

次に、電話が鳴りました。千代さんが手をふきながら受話器を取りました。

台所ではお湯が沸いたようです。

「仕方ないな。」

一郎さんはお茶をいれにいくことにしました。

「もう台所に立つことになってしまったぞ。」

一郎さんはつぶやきましたが、そんなに嫌そうではありません。隣の部屋から双子の笑う声が聞こえました。

あなたは「男は仕事、女は家庭」というように、性別によって男女の役割を決めてしまうことはありませんか。

近年、仕事を持つ女性が増えてきました。その多くは家事・育児・介護も担い、「男は仕事、女は家庭も仕事も」という新たな役割分担が定着しつつあります。

しかし家事・育児・介護に限らず、地域の活動などあらゆることを、男女が互いに尊重しながら共同で行う、そんな社会でありたいものです。

男女共同参画社会を考える
『井伊分(いーぶん)さんちの双子日記』

第2話

イメージで決めてる？



井伊分さんちの双子・靖乃ちゃんと修斗ちゃんは両親と一緒に出かけです。

父親の登さんは、家事・育児にとっても積極的。と言うのも、育児休暇中の美沙さんが、一度無理をしすぎて倒れてしまったからです。妻のSOSサインを見逃した後悔に加え、自分一人で赤ちゃんの世話と家事をしてみたら、その大変なこと。それまでの<手伝う>という気分から<一緒に>という意識に変わりました。

<勝手に『育児は女性の仕事』とイメージしていたんだよな。>

「あら、かわいい双子ちゃん、女の子かなあ？」登さんの思いなどおかまいなく、通りがかりの人が声を掛けてきました。

おそろいの服で大きなベビーカーに乗っているかわいい双子は、とても目立ちます。

「いいえ、男の子と女の子なんですよ。」

また、ある日、公園を散歩する一家に声をかけてくる人がいました

「かわいい双子さんだね、男の子かな？」「いいえ、女の子と男の子なんです。」

そんなことが何回かありました。

<今日は女の子って言われた。><今日は男の子って、なんでだろうね？>

と話していた二人ですが、数日後、美沙さんが「あっ、そういうことだったのね！」と言いながら登さんに何かを渡しました。

それは『いちのみやし男女共同参画情報紙 いーぶん』というリーフレットでした。

「服の色を見て、みんな言っていたんだ。」

ジェンダーの説明を読んだ登さんは、思いあたったようでした。

あなたはイメージで性別を決めてしまうことはありませんか。

「男性は子どもを産むことができない」というような生物学的な男女の別ではなく、例えば「育児は女の役割」「代表者は男がやるもの」というような習慣的な考え方による性差を「ジェンダー」といいます。「青色は男、赤色は女」というのもその一つです。

このジェンダーによって「育児は女の役割だから、男がやるものではない」「代表者は男がやるものだから、女がやるものではない」と思うてしまうことはないでしょうか。

わたしたちは一人ひとりがさまざまな個性や能力を持っています。個人の力を発揮するためにも、性別にとらわれない考え方を持ちましょう。

男女共同参画社会を考える
『井伊分(いーぶん)さんちの双子日記』

第3話

女の子なのに？

男の子のくせに？



双子の靖乃ちゃんと修斗ちゃんはすくすく育ち、今では5歳になりました。

今日は二人が楽しみにしていた保育園の七夕祭り。平日ですが、多くの人が来ています。

「いつもうちの子がお世話になっています。」

「いえいえ、こちらこそ。弱いくせに、いつも年上の子とけんかしては、靖乃ちゃんと修斗ちゃんに助けてもらっているみたいで。」

双子の両親の登さんと美沙さんは驚いて顔を見合わせました。少し緊張しながらお遊戯（ゆうぎ）をしている二人からは、そんな話を聞いたことはありません。

横で何気なく話を聞いていた双子の祖母・千代さんが思わず小さな声で言いました。

「修斗はともかく、靖乃は女の子なのに、けんかの仲裁（ちゅうさい）なんて……。」

「いいじゃないか正義感が強くて。男も女も関係ないさ！」と祖父の一郎さん。

「あら、登の小さい時は、『大の男が仕事を休んでまで保育園に行けるか！』なんて男らしさにこだわっていたあなたが大進歩ね。」

ひとつせき払いをして一郎さんは聞こえないふり。

周囲を見渡すと、昔に比べてお父さんの姿が随分と多いようです。その中の一人でもある登さんが、妻の美沙さんに向かって言いました。

「二人のそんなところは美沙似かな、僕なんて何度も『男の子のくせにおとなしくて心配』って言われたよ。」

「わたしは『女の子なんだから、おとなしくしなさい』ってよく言われてたわ。」

靖乃ちゃんと修斗ちゃんが、大勢の中に両親を見つけて、にっこり笑いました。

あなたは「女らしさ・男らしさ」と聞いてどんなイメージを思い浮かべますか。

子どもを育てる時、「女は女らしく、男は男らしく」と望むことも多いと思いますが、多様な個性を持っている子どもたちの「良いところを伸ばしたい」という気持ちは、すべての大人に共通した思いだと思います。

一般的に、「期待されている」イメージとして、女らしさには「優しさ・素直さ・気配り」など、男らしさには「強さ・勇気・積極性」などがあります。

「女の子なのに！」「男の子のくせに！」と性別のイメージにとらわれるのではなく、男女問わずだれが持ってもよい性質であれば、すべての子に期待してもよいのではないのでしょうか。

男女共同参画社会を考える
『井伊分(いーぶん)さんちの双子日記』

第4話

どうして

自分の名前書かないの？



靖乃ちゃんと修斗ちゃんは小学校に入学し、両親の美沙さんと登さんは子ども会や地域の活動などにも参加する機会が増えてきました。

今日は夫婦で参加しているボランティア団体の会合の日です。今回は登さんが出席。

「どうしようかな、役員をお願いされたよ。」

「今年は、子ども会の役員もあつたわよね。こちらの役員は私が引き受けましょうか。」

二人は話し合った結果、主に活動できそうな美沙さんの名前で役員名を提出しました。

後日、役員会に出席した美沙さんは、名簿をもらってびっくり。役員会の参加者は女性がむしろ多いくらいなのに、名簿は男性の名前がやけに多かったのです。

美沙さんは「>とどうして?」と思いながらも、その日は黙って帰りました。しかし、やはり気になります。二回目の役員会で思い切って聞いてみました。

「あの、役員名簿のことですけど…。夫の名前で登録するのですか？」

「…変なもので、そう書く方が多くて。」誰もがはっきり答えられない中、あるベテランの人は、今そのことに気づいた様子で名簿を見ながら言いました。役員会のあちこちから小さなつぶやき声が上がります。

「そう言えば変だな。」「みんなそうしていたから…。」「でも、やっぱりおかしいよ！」

周囲を見渡していた取りまとめの人が、ゆっくりと大きな声で提案をしました。

「どうでしょう、これからは実際に活動している人の名前で書きませんか。その方が連絡もしやすいですし。ボランティアを行うことに男性も女性も関係ないですから。」

この一件から名簿はがらりと変わりました。

あなたは、「エンパワーメント」という言葉を聞いたことがありますか。

男女共同参画の場面では、「女性が力をつける」という意味で使われます。

「エンパワーメント」の第一歩は、現在の状況の中で問題を自覚することです。

そこから、問題の原因に気づき、改善に向けて行動をし、新しい価値と文化を創ることが始まります。

また、ひとりが力をつけることにより、他の人の力になり、お互いを高め合うことにもなります。

あなたの身近にも、性別に関する困った習慣はありませんか。「なぜ？」と思うことに対して少し働きかけてみましょう。

男女共同参画社会を考える
『井伊分(いーぶん)さんちの双子日記』

第5話

家庭科はだれの科目？



双子の靖乃ちゃん・修斗ちゃんは小学校高学年になりました。

二人はいつも、学校帰りに祖父母の家に行きます。共働きの両親が留守の間、ここでお手伝いをしたり、遊んだり、宿題をしながら、自宅に帰るまでの時間を過ごします。

でも、いつもとは少し様子が違うようです。

「危ないかな?」「勝手にやったら叱(しか)られるよ!」「でもお…。」

それは、祖父の一郎さんの耳にはちゃんと届いていました。

「おじいちゃんも仲間に入れてくれ、怒らんから、ほら。」

今日は、双子の母親・美沙さんの誕生日。本当は父親の登さんと一緒にお祝いのご馳走(ちそう)を作るつもりでしたが、登さんがどうしても仕事で遅くなりそうなのです。

結局、祖父母の一郎さん・千代さんも一緒に、双子の家へ。

「靖乃も上手だけど、修斗は本当に器用だな。」

指南役の千代さんが足りない食材を買いに出かけている間、お目付け役の一郎さんは一緒に台所に立ちながらしみじみ言いました。ほめられた修斗ちゃんは得意顔。

「家庭科は大好きだもん。中学校ではもっといろいろな料理作るんだって、楽しみ!」

<今は、男の子もやるのか?>一郎さんは、家庭科が男女共修と知りませんでした。

『仲間だから手伝って』と双子に言われた一郎さん。ただ見ている訳にもいかず、不慣れた料理に挑戦です。孫とは言え、小学生に負けるわけにはいきません。

おまけに、いざ料理をしてみると、思っていたよりずっと楽しいことに気づきました。

夕方になって、無事にお祝いのご馳走は完成。

一郎さん・千代さんは一緒に作った料理のおすそ分けをお持ち帰りです。

千代さんが嬉しそうに言いました。

「今度の登の誕生日も手伝ってほしいですって。」

「よし、それなら家で特訓だ、負けられん!」

ご機嫌の一郎さんが決意も新たに言いました。

家庭科の目的は、生活に必要な基礎的な知識・技能・態度の習得です。

中学では平成5年度から、高校では翌年度から、男女共修が義務づけられています。つまり家庭科は「みんなの科目」です。

ひとりの人間として、衣・食・住など、日常生活の様々なことができていますか。そして、ともに生きるために助け合っていますか。

男女共同参画社会を考える
『井伊分(いーぶん)さんちの双子日記』

第6話

介護休暇はだれが取る？



近くに住む双子の祖父母・一郎さんと千代さんの家で、息子の登さんが食事の準備をしています。しかし、いつもに比べて家はやけに静かな様子。実は一郎さんが体調をくずし、その看病疲れで千代さんまでが倒れてしまったからです。

「二人とも無理しすぎたんだね。でも、明日からは大丈夫、介護休暇を取るよ。」

おかゆを運びながら登さんは両親に言いました。

「えっ、登が？」起き上がりかけた二人は、思わず聞き返します。

「美沙も休むって言ってくれているけど、まず僕から休みを取るからね。」

二人は複雑な心境。もちろん息子の優しい気持ちには感謝しています。でも、＜何で登が？嫁の美沙さんではなく？＞と口には出さないものの、本音では思いました。

それは、美沙さんも実は気にしていることだったのです。

登さんは、そしらぬ顔で続けて言いました。

「会社でも介護休暇中の先輩がいるけど、一人っ子どうしのご夫婦なんだって。だから、親御（おやご）さん四人とお子さんたちのことを色々考えて決めたらしいよ。」

「それは…大変そうだな。」

二人はおかゆを口に運びながら、美沙さんの両親のことを思い出しました。今は健在な美沙さんの両親も、いつ自分たちと同じようなことになるかもしれません。

「協力しないとやっていけないわね。」

そんな話をしているうちに、双子の二人が美沙さんに連れられてお見舞いにきたようです。

「おじいちゃん、おばあちゃん、早くよくなって！」

随分大きくなったとは言え、まだまだ手の掛かる、かわいい双子にそう言われて、一郎さんも千代さんも早く元気になろうと思いました。

あなたは「育児・介護休業制度」を利用したことがありますか。

家庭生活と職業生活の両立を支援し、育児や介護を行う負担を軽減するための制度で、休業の条件等について定められています。

現在、事業主には制度の導入が義務づけられ、育児・介護休業の申出や取得を理由とする解雇、不当な取り扱いが禁止されています。

あなたの周りでは、家族や友人・地域の人々が、助け合いながら育児や介護をしていますか。男女に関わりなく、お互いに協力して様々なことをしましょう。

男女共同参画社会を考える
『井伊分(いーぶん)さんちの双子日記』

第7話

男は理系？女は文系？



靖乃さん・修斗さんも高校生になりました。

進路についてもそろそろ考えなければなりません。

「どうしよう、まだ迷うよ…」修斗さんは保護者会が終わった日の夕食の席で言いました。

「靖乃は早く決めたいわね！」と母の美沙さん。

「だって得意なものがはっきりしてるもん。」

靖乃さんは、理数系が得意で、コンピューター関係に興味もあるため、理系に進むようです。

「『男は理系、女は文系』という人も昔はいたけど…最近はどうやって進路を選んでいるのかな？」

父の登さんは双子の二人にたずねました。

二人の話によると、性別に関係なく、得意分野で選択することが多いようです。また、職業の選択の幅が性別によって狭められることもあった昔と違い、今では将来の道も多様化しています。

修斗さんにしてみれば、選べるからこそ迷ってしまいます。

後日、祖父母の一郎さん・千代さんとも、そのことについて話す機会がありました。

開口一番、「男は理系ってもんだろ？」と一郎さん。

「あなた、そんな単純に決められるものなら、初めから迷いませんよ。」

千代さんが助け舟を出してくれましたが、修斗さんは思わず苦笑い。『男は理系、女は文系』という人は、今でも案外近くにいました。多分、父の登さんが食事の時に言いよどんでいたのは、学生時代に一郎さんから同じようなことを言われたからでは…と修斗さんは考えました。何気なく言った本人の方は覚えていなくても、言われた方は忘れていないようです。

「自分で考えて選ぶのも勉強かぁ。」と修斗さんはつぶやきました。自分自身の好きなもの、得意なもの、将来やりたいと思っていることを色々考えてみました。

最終的には、美術関係の仕事に憧れて、文系を選んだようです。

あなたは進路や職業など様々な選択をする時に、性別にとらわれず、自分の個性や能力を十分に発揮できるものを選んでいきますか。

最近では、「保母⇒保育士」や「保健婦⇒保健師」などのように、職業名が男女両方に用いることのできる表現に変わり、男性のみを採用の対象としていた、例えば消防士のような職業にも、女性が就き始めています。

男女が社会の対等な構成員として活躍できる社会を目指しましょう。

男女共同参画社会を考える
『井伊分(いーぶん)さんちの双子日記』

第8話

DVなんて他人事？



双子の二人も19歳。

靖乃さんは今日も大学で基礎科目の授業を受けています。今日の「女性学」の講義では、DV（ドメスティック・バイオレンス）という言葉が出てきました。

「DVは昔、『家庭内暴力』と言われ、警察や行政は不介入でした。ですが、今では『DV防止法』ができ、社会問題として取り上げられるようになりました…」

大学の先生は講義を続けます。

靖乃さんは漠然と、被害者の数はそんなに多くなく、特別な人のことだと考えていました。

ところが、話を聞くと想像以上の人が被害に遭っていることを知りました。

「またDVは、殴る蹴るなどの身体的な暴力だけではなく、『俺が稼いで、食べさせてやっているだろ！』という言葉や、『誰に会いに行くんだ！』と怒鳴って人づきあいを制限することも含みます。」

靖乃さんは講義に驚く一方、何だか悲しくなりました。

家に帰り、何気なく見ていたテレビでも、DVに関連したニュースが出てきます。

靖乃さんは、近くにいた母・美沙さんに今日の講義で聞いたことを話しました。

美沙さんは、靖乃さんが思っていた以上に、DVについての知識を持っているようです。

「すごいね、お母さん詳しい！」

「実は……。昨日来ていた友達も、大変だったの。専門の窓口に相談して、もう解決したけどね。」

「えっ！」靖乃さんは母・美沙さんの言葉に今日一日で一番驚きました。

DV(ドメスティック・バイオレンス)は、夫婦間での、または親密な関係にある恋人などからの暴力のことをいいます。

DVには、殴る蹴るなどの暴力のみならず、威嚇(いかく)する、存在や要望を理由なく無視する、親・兄弟姉妹や友人と付き合うことなどを制限するなどの心理的に苦痛を与えることも含まれます。

これまで「犯罪とまでは認識されていなかった」配偶者等からの暴力を「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律」(通称:配偶者暴力防止法、DV防止法)では、犯罪と規定しました。この法律は、通報・相談・保護・自立支援等の体制を整備し、配偶者等からの暴力の防止と被害者の保護を目的としています。

男女共同参画社会を考える
『井伊分(いーぶん)さんちの双子日記』

第9話

人目を引けばいい？



双子の修斗さんも社会人になり、広告代理店のデザイン部門に就職しました。
今は、先輩たちの手伝いが主な仕事。当然ですが、すぐに大きな仕事を任せてもらえるわけはありません。憧れの仕事だったはずが、少しやる気は下降気味。
そんなある日「まずは好きにやってみて、取引先の意見を伺うこと」と、ポスターの仕事初めてまかされました。

しかし、取りかかってみたものの、経験が浅いからか、いい図柄が思いつきません。

締め切りはどんどん迫ってきます。

迷った修斗さんは、＜若いかわいい女の子の笑顔＞なら注目されるだろうと考えて、がんばってデザインを提出してみました。

自分としては、いい感じの仕上がりです。

「井伊分さん、ポスターの件で電話だけど。」

翌日、こちらからかける前に、取引先から電話がありました。

結果は不採用。理由は『人目を引くことだけではなくて、うちの商品の良さを前面に出してもらいたい。』と簡単な一言。

取引先から必死でやり直しを取り付けた修斗さんは、＜今度こそ＞と、他社商品との違いや、同業者のポスター研究からスタート。今までに得た知識や技術もフル活用です。

数日後、再提出の結果は採用。

「ポスターは、たくさんの人が見るので、いろいろなメッセージになるんですよ。何を伝えたいか、何が伝わってしまうかまで考えて、次回もお願いしますよ！」

「はい、ありがとうございます。がんばります。」

電話口で見えない相手におじぎをしながら、修斗さんは仕事にやりがいを感じるとともに、大きな責任があることに気がつきました。

わたしたちの間を行き交うメディア(媒体)は、たくさんの情報を運んでいます。

そのメディアの特性を理解し、読み書き(受信・発信)する能力を「メディア・リテラシー」といいます。つまりメディア・リテラシーは、受信(分析的に読み解く力)と発信(社会的なコミュニケーション)を創造する力です。

テレビや雑誌、広告などから受け取る情報は、わたしたちの価値観・考え方や行動に大きく影響します。その中には、人目を引くために、若くて美しい女性を飾りとして利用したものや、性別によって役割を固定化する内容(ジェンダー)も多くあります。

男女共同参画社会を考える
『井伊分(いーぶん)さんちの双子日記』

第10話

結婚したら当然夫の名字？



双子の靖乃さんは、大学時代から付き合っていた彼と結婚することになりました。

父の登さんと祖母の千代さんは何やら話をしています。

「靖乃は名字変えたくないって言っていたけど、婚姻届には『夫の氏』を使うことになっていたよ。いいのかな？」

靖乃さんの父・登さんは小さな声で言いました。

「いいじゃないの！」と答えたのは、遊びに来ていた祖母・千代さん。＜跡取りのことなら、修斗がいるでしょ。＞と言わんばかりです。

「母さん、そうじゃなくて…」

実は、前々から靖乃さんは『井伊分』って名字珍しくて、お得意様にも業者さんにも社内でも覚えてもらっているから、今さら変えたくない。』と言っていました。その靖乃さんが、「夫の氏」に決めて新しい名字になることは、仕事で積み上げてきた業績をゼロにして再出発することを意味します。

「仕事は続けることにしたって言っていたから、顔を合わせず電話や文書だけで取引する遠方の方とはどうするんだろうと思って。」

「…気づかなかったわ。言われてみれば確かに不便よね。靖乃の結婚を喜ぶばかりで、私ったら本当に考えなしのおばあちゃんね。」千代さんは、ぼつりと言いました。

小さな頃から負けず嫌いでがんばり屋だった孫が、今は仕事でも活躍していることは、千代さんにも容易に想像がつきます。

少し二人がしんみりしてしまったところに、噂の靖乃さんが通りかかりました。千代さんは、遠まわしに仕事のことを聞いてみました。

「そうそう、でも結局、会社では『井伊分』のままなのよ。」

きょとんとした顔をしている父と祖母に向かい、にっこりしながら、靖乃さんは続けて言いました。

「旧姓使用っていうのを頼んでみたら、あっさりOKだったの。」

戸籍では、昭和22年の民法改正によって「家制度」が廃止されました。現在は、男女の平等、個人の尊厳を基本として、結婚と同時に夫婦単位で新しい戸籍を作ります。名字(氏)は、夫または妻のものをすることになります。

また、婚姻前の氏を使用できる「旧姓使用」については、職場で認められるところが増えつつあります。(一宮市役所でも14年度から実施。)

第11話 双子日記の最終回？



井伊分一家に、今度は新しく家族が増えることになりました。双子の靖乃さんに続き、修斗さんが結婚し、少し先には小さな命が誕生してくるようです。

今日は、ひ孫を楽しみにしている一郎さん・千代さんの家に大集合。

「名前はもう考えてる？」「女の子かな、男の子かな」と、みんなうきうきした様子。

「子どもを育てるってことは楽しみも大きいけど、本当に大変なことよね。」千代さんが思い出したように言いました。

「わたしたちは双子だったから、特にそうだったでしょ？」と靖乃さん。

双子の両親、美沙さん・登さんは顔を見合せ答えました。

「何もかも初めてづくしで、母親だからと自分一人にまかされていたら、双子でなくても不安だったと思うの。でもウチは何でもみんな一緒に頑張ろうって感じだから！」

「やってみると育児も家事も楽しいものさ。」

二人は双子を分け隔てなく育てるため、さまざまなことに協力し合いました。それは、祖父母の一郎さん・千代さんも同じこと。不慣れなことも『かわいい孫のため！』とチャレンジの連続でした。

「実は…」

思い出話に花が咲く中、修斗さんがそう言って、妻の大きなおなかを見つめました。

何となく、みんなも目がいきます。予定どおりにしては少し大きい様子。

「えっ、まさか！」だれかが言いました。

「どうやら、双子らしいんだよね。」

修斗さんはその後、会社へも相談し、夫妻で交代しながら育児休暇を取ることにしたそうです。(終)